
田舎のトイレ

藤木 大成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田舎のトイレ

【Nコード】

N7510E

【作者名】

藤木 大成

【あらすじ】

忘れていた記憶がよみがえった。子供の頃田舎であった本当にあった恐怖体験、、、少年がトイレで見たものは、、、

最近と言っても3年位前のことなんですけど、田舎のおばあちゃん（母の母）が亡くなったんですよ。

僕の田舎は茨城県のある町なんですけど、で、お通夜の時にね、親戚や近所の人たちが集まってわいわいやってました。

そのときにちょうど僕の母が僕のことを田舎の親戚達に話しをしてましてね。こんなことを言ったんですよ。

「この子はまだ小学生のときに毎年連れてったんだけど、トイレが外にあったでしょ、それが嫌いで行きたくないってごねてね。あるとき夜起きて一人でトイレに行って凄い勢いで泣き出したことがあってね、、、」

えっ、うそだろ、僕は背中から冷や汗が出て、胃の中をかきむしられたような感じがしました。

遠い、幼いときの記憶、、、夢だと思い込んでいた記憶、、、それは幼心の恐怖心から、自分で夢だと決め付けていた記憶でした。

でも母の一言からそれが夢ではなくて事実だったと確信するはめになったのです。

聞いて下さい。

確か僕が小学校の4年か5年生の時だったんでもう30年以上前のことです。

僕の田舎は茨城県のR市というところにあります。県道沿いの大きな旧家で、その頃はまだわらびき屋根の本当に田舎の家といった感じでした。

毎年夏休みには父に留守番させ、母と僕と弟で田舎に行くのが楽しみでした。

その年の夏休みもちょうどお盆の時期に帰省しました。田舎の家

には僕らをはじめ、親戚が集まり、楽しく過ごしていました。

東京で生まれ育った僕らには、見るもの全てが珍しく、自然と思い切り触れ合って遊ぶ楽しさは、田舎に来たときくらいしか味わえなかったので、毎日目一杯遊びまくっていました。

ただ、田舎の家にはひとつだけいやな所がありました。それはトイレです。田舎の家のトイレは、なぜか庭の隅にありました。多分汲み取り式だったので、臭いのせいで外にあるのだと思いますが、それがめんどろで、また面倒なだけならいいのですが、夜は庭が暗いのでどうしても行く気にはなれませんでした。

まあそれを除けば、帰りたくないほど楽しくてしょうがなかったんですけどね。

1週間くらい遊んでいよいよ明日は東京に帰るといふ日の夜のことでした。

最後の夜スイカをたくさん食べた僕は、夜遅く目を覚ましました。案の定トイレに行きたくなってしまいました。

母をおこそうとしましたが夕べお酒を飲みすぎたせいか、まったく起きる気配がありません。

我慢して寝てしまおうかと思っただんですが、思えば思うほど寝むれなくなり、我慢ができなくなってしまいました。

僕はしぶしぶ起き上がると、薄暗い部屋を出て廊下を歩き、玄関を開け、庭に出ました。トイレはそこから20メートルほど歩かなければなりません。庭には名前のわからない樹木がたくさん生えており、その間の石畳を歩いていきます。虫のなき声、牛ガエルのなき声、風にゆすられる草木のざわざわという音が、なんかひどく不気味な気がして、僕は恐る恐るゆっくり向こうにぼんやり見えるトイレの明かりを目指して、歩いていきました。

突然、風がやんで、今まで聞こえていた音がすべてやみました。

どこからともなく、「ざっ、ざっ、ざっ」と何人もの人が歩いているような足音が聞こえました。

なんだろう、でも僕はとりあえず安心しました。きっと前の県道を人が歩いていると思いました。

その正体がなにかもしらずに、、、
トイレに着いて用を足していると、あの行進のような足音がだんだん近づいてきました。そのとき僕は子供ながらに何か変だなと思いました。今思えばこんな夜中に行進をしている人たちがいるわけがないのですから、、、

僕は怖くなり早く家に帰ろうと思いました。
行進はもつともと近くなり確かに僕の田舎の家前で止まりました。

僕は恐ろしさのあまり、身動きひとつできなくなっしまいました。
た。まるで金縛りにあったように。

すると今度は押し殺すような男の声が聞こえました。

「誰かいるぞ」

そしてひとつの足音が、僕のすぐそばまで迫ってきました。僕は体が震えて汗があごからばたばたたれてきました。動けない僕のすぐ後ろに誰かがいました。

見ることはできないけれど、気配や息遣いでわかりました。

瞬間僕は背後から、肩をつかまれぐいと引き寄せられました。

その男は軍服を着ていて、額からは血を流し、血と汗で顔がわからないほどでした。

男は凄まじい形相で僕を睨んでいました。

僕は殺されると思いました。

すると男の後ろのほうから、「やめとけ、まだ子供だ」という声がしました。

その後掴まれていた肩はすつと軽くなり、男は煙のように消えてしまいました。

僕はその場に立ち竦み気が付いて見ると火の付いたように泣いていました。

後で、すべてを話そうとも思いましたが、信じてもらえないだ

ろうつという思いと、話すのも恐ろしく、少しでも早く忘れたいこともあり、誰にも話さずにいました。

そのうち5年、10年と経ち大人になるにつれ、僕の記憶の中でも遠い日の出来事として、事実なのか夢なのかさえわからなくなっていました。

それが、母の一言によつてはつきりと思い出してしまったのです。あの軍人が誰なのか、いまだにわかりません。あまり思い出したくもないし、でも肩をつかまれたときの感触と、あの血みどろの顔は忘れることができません。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7510e/>

田舎のトイレ

2011年1月11日15時32分発行